

性問題行動における認知の 役割に対する考察

本 多 隆 司

はじめに

性問題行動など反社会的行動については、心理学側面、生物学的側面、社会学的側面から研究されてきたが（吉澤，2005；吉澤・大西・ニジ・吉田，2015），心理学においては認知-行動的アプローチがひとつの大きな流れである。反社会的行動における認知-感情-行動の不適切な連鎖に着目する認知-行動的アプローチは、性問題行動の理解の枠組みであると同時にこのアプローチによって心理的支援（セラピー）や心理教育が構成される。認知は自己を含めたある対象について知ることであって、知覚、記憶、学習、思考などを包む知的な活動であるとされるが、性問題行動に対する介入において認知の比重は極めて大きい（Murphy & Page, 2014）。

性問題行動における認知は後述するように事後の心理的支援や心理教育の過程で明らかになることから、その過程での自己報告をもとにカテゴリー化や尺度化がなされ検討が進められる。ここでは文献を通して、性問題行動の実行者/加害者を対象とした心理的支援（セラピー）や心理教育にお

キーワード：性問題行動，心理的支援，認知の歪み，スキーマ，社会的情報処理

ける認知について、これまでの位置づけや考え方を振り返り、今後の方向性を検討する。

なお、ここでいう性問題行動は、刑法、児童福祉法、さらに都道府県条例である迷惑防止条例や青少年保護育成条例などの法律に対する違法行為や性犯罪だけではなく¹⁾、違法性や加害性が低く犯罪行為とまではいえないうが状況によって好ましくない不適切な性行動も含まれる（本多・伊庭, 2016, pp. 15-16）。また、心理的支援の実践においては、非行少年（未成年者）、知的・発達障害者児者をも対象にしている（本多, 2011; Hansen & Kahn, 2012; 伊庭・本多, 2016; 本多・伊庭, 2016）。

1. 性問題行動における認知の歪み

抑うつなど心理的、精神的な問題だけでなく、性問題行動をはじめ物質乱用、怒り（アンガー・マネジメント）など反社会的行動を対象にした心理的支援やそのプログラムの枠組みは認知-行動的アプローチ（認知行動療法）であることが多い。認知-行動的アプローチでは、認知は感情・思考・行動・身体と関連しているとし、症状や問題行動は直面した出来事や問題そのものではなく、それらに対する認知の内容やプロセスの結果であるとする。認知が行動などに影響するのならば、問題のある行動は誤ったまたは偏った認知が引き起こしたのだと考えることができる。これを認知の歪みと呼び、性問題行動の実行者/加害者を対象とした心理的支援プログラムの重要な対象となっている。認知と行動等の結びつきに着目するアプローチはまた、実行者/加害者が自らの起こした行動について自分自身が理解する枠組みをも提供し、問題行動を自己コントロールするための端緒となる。

この分野での先行研究である Abel, Gore, Holland, Camp, Becker, & Rathner (1989) は、小児を対象とした性犯罪者に対して質問紙法による

性問題行動における認知の役割に対する考察

調査研究を行なった。彼らは認知を「個人の内的なプロセスであって、性犯罪者が小児を対象とした性犯罪行動を合理化しようとする正当化、知覚、判断を含んだもの」(p. 137)とし、「社会の基準に反する行動に関与した結果、通常生じると思える不安、罪悪感、自尊感情の喪失を感じることなく現在も続く子どもへの性加害を正当化する」(p. 137)ものを認知の歪みとした。調査研究に使用された29の質問項目（3項目は分析結果により除外）のうち、表1。「認知スケール：小児対象性犯罪者の回転後因子マトリックス (Abel et al., 1989, p. 143, Table 1) の上位3項目を認知の歪みの例としてあげる。

項目17：幼い子どもを無理矢理愛撫した大人も、幼い子どもに無理矢理触らせた大人も子どもをひどい目にあわせたことにはならない。

項目6：13歳（またはそれ以下）の子どもと大人のセックスは子どもに心理的な問題を生じさせることはない。

項目24：子どもが大人とセックスすれば、子どもは大人との経験だと思返し、ポジティブな経験だと思うだろう。

Abelらが指摘するように認知の歪みは、こうした性加害（犯罪）に関与すれば当然生じるはずの罪悪感を感じにくくし、自尊感情の低下を防ぐという機能がある。つまり、加害者自身が実行した行動の結果責任の所在をあいまいにする。性加害の主要因とみなされ、こうした悪影響を修正するために、自己の加害行為に対する否認、正当化、矮小化などの認知の歪みは過去20年間にわたって心理的支援（セラピー）の主要な焦点であり続けた (Murphy & Page, 2014)。

知的・発達障害児者を対象としたプログラム (Hansen & Kahn, 2012) では考えかたエラーと呼び、その例として、『人のせいにする』『ちいさなことだ、たいしたことではない、と考える』など10種があげられる。いずれも社会において常に正しいとは言えない自分勝手な思い込みや誤った理解で

ある。

認知の歪みは自らの問題行動（加害行為）に対する説明や理由づけや行動化した状況に対する判断など自己の思考や認識の内容に関する説明である。したがって性問題行動の実行者/加害者の認知の歪みに対する心理的支援では、自己の認知を意識化し、言語化可能なメタ認知レベルで修正し書き換え、行動に常に反映させることをめざす。

実践や研究が蓄積し、認知の歪みに対して再検討されるようになった。Mann & Shingler (2006) は、認知の歪みに焦点化しすぎているのではないかと、また否認、正当化、矮小化などの認知の歪みが言い訳であるならば、それは社会でのノーマルな行為つまり「失敗や誤りに対する適応的な反応」(Mann & Shingler, 2006, p. 174) ではないかと述べる。非行少年が自分の行為やその結果について「たいしたことじゃない」と言う時、実際の行為を隠べいし、被害をことさら小さく見せようと意図した発言や言い訳に思えるが、一方本当に知らない、理解力が追いついていないという可能性も排除できず、意識的な事実の歪曲だと判断するのは容易ではない。そのうえ、こうした表現の多くは自己報告であって、司法プロセスなどで明らかになることもあると思われるが全てが公開されているわけではなく、その後の指導プログラムの実施中に明らかになることも多い。加害行為の実行時の思考内容かそれとも事後に着想したものかが判然としない事例もある。

Murphy & Page (2014) は文献のレビューから、認知の歪みとは環境要因に対する知覚（または誤った知覚）、注意、情報処理、行動の結果に対する評価（または誤った評価）など心理的プロセスではないかと考えた。認知が知覚、記憶、学習、思考など包括的で複雑な知的な活動であれば、その歪みもまた人間行動のさまざまな面に作用しているはずであって、単に加害行動の事後説明に留まるものではないだろう。結局のところ、否認

性問題行動における認知の役割に対する考察

や言い訳など認知の歪みは、動機の反映である可能性、加害者の羞恥心や罪悪感の反映、自尊感情を維持する試み、親密な周囲の人からの支持を維持する試みなどの反映であるかもしれない。加害行為に限定すれば、加害者が自己の加害行為について矮小化し言い訳をすること自体が、社会のルールから逸脱し社会や自己の価値観とも相いれず罪悪感を感じとったことを表しているとすれば、「犯罪からの離脱の予兆」(Murphy & Page, 2014, p. 154) という可能性もある。

こうした議論から、認知の歪みは性加害のみに見られるものか、性加害の主要因であるか、単なる事後の自己報告ではないかなどの疑問が呈され、研究の焦点はむしろそうした認知を背後から支えていると思われるスキーマに移りつつある。

2. 認知に影響する背景情報

認知のプロセスが自己の思考や感情に対する認知やその言語化能力までも含む包括的なプロセスであるならば、心理的支援の対象者にあるさまざまな特性や生活歴など認知に作用する個別の背景情報は無視できない。ここでは背景情報として以下の3点をあげる(隈部・伊庭・細田・姥・竹腰・福嶋・本多, 2015; 本多・伊庭, 2016)。これらは単なる個別背景ではなく、後述するスキーマの形成に強く影響している要因のひとつかもしれない。

(1) 知的障害の特性 知的障害は、その定義から認知能力にも制約がある²⁾。そのため対人関係や性、社会性において正しい理解に基づく社会的スキルの学習や獲得が困難になるかもしれない。誤ったあるいは未熟な理解は認知の歪みとの判別が容易ではないことがあるが、認知能力の制約による不十分な理解が不適切行動につながるのであれば、それらを心理的支援や心理教育によって修正する必要がある。

(2) 虐待やいじめなどの被害体験 Levenson & Willis (2014, p. 250) は、「性犯罪者など犯罪者群は一般群のサンプルに比べて早期のトラウマの履歴があることが多い。そのうえ、あるトラウマ形態、特に児童期の性虐待は他の犯罪者タイプよりも性犯罪者においてよく見られる。」と指摘する。特に、知的・発達障害児者の被虐待や性被害のリスクは高く、反社会的行動のある者のうち被虐待体験は約61%にみられた(川口・松澤・細田・陳・伊庭・隈部・福嶋・本多, 2007)。研究により違いがあるが性的虐待を受けた知的・発達障害者は26%から83%の範囲におよび、さまざまな理由により脆弱であると指摘されている(Blasingame, 2005, pp. 5-6)。被虐待体験や被害体験がすぐさま反社会的行動や性問題行動に結びつくものではなく加害行為を正当化するものでもないが、その影響は深刻である。被虐待や被害体験による過覚醒、麻痺、侵入などのトラウマ症状や自己効力感の低下が顕著な場合、さまざまな不適応をもたらし誤ったあるいは偏った認知と重なりあうことがある。

(3) 愛着形成を基盤とした対人関係の問題 種々の虐待や家庭機能不全などの児童期逆境体験などが原因となって、幼少期の愛着形成に何らかの課題がみられる事例がある。上記の(2)被害体験の影響と相まって愛着形成上の課題や養育環境の問題は、後の対人関係や社会性の問題へと波及し、性問題行動に影響している場合がある。

3. 社会的情報処理としての認知

認知を自己や他者それらを含む社会をどのように認識し理解するかという社会的認知としてとらえなおすと、それらを知覚し、解釈し、反応するという情報処理の一連のプロセスとしてモデル化した社会的情報処理と考えることができる(Mann & Shingler, 2006; Murphy & Page, 2014)。

Treat, McFall, Viken, & Kruschke (2001, p. 549) は McFall の社会的情

性問題行動における認知の役割に対する考察

報処理モデルを援用し、「性強制であると判断される行動は一つまたはそれ以上の情報処理段階での障害に起因している。解読段階では入力される刺激情報が知覚され、組織化され、解釈される。意思決定段階では反応が選択される。実行段階では選択した反応が実行される」とし、最初の解読段階の困難さや障害が情報処理システムを通じて伝搬すると仮定した。自己、他者（被害者）、状況を過不足なく知覚し組織化したか、それらの結果を正しく解釈したか、が解読段階に重要とされる。Treat et al. (2001) では、白人女性の写真を題材に情緒的側面と身体的ポーズへの関心が比較検討され、手がかりの見落としがなかったか、情報の排除等がなかったか、解釈は一般的な社会のルールに沿ったものかなどが検討された。この研究では大学生を対象に実施されたが、認知の歪み等の実証的研究は性犯罪（として有罪になった）者を対象に実施されているものが多い。

一方、発達心理学、認知心理学からの観点であるが、吉澤他（2015, p. 30）は、問題行動が実行されたのは「この社会的情報処理のプロセスでなんらかのエラーやバイアスが生じ、その状況や場面で得られた情報が適切に処理されずに、誤った方向での意思決定が行われたため」であるとした。中高生を研究対象とした吉澤・吉田（2010）は、Crick & Dodge (1994) の社会的情報処理モデルに基づいて、情報処理段階を「潜在的な知識構造（記憶貯蔵、社会的スキーマなど）」と、「より直接的に行動を規定する状況や対象に依存したオンライン処理（手がかり処理、目標分類、反応決定など）」とに分け、両者は相互に作用し、「基本的には、潜在的知識構造が、状況や対象に依存したオンライン処理にエラーやバイアスを生じさせることで、間接的に反社会的行動に影響を及ぼす」（吉澤他, 2015, p. 19）と考えた。

4. 『性暴力被害とわたしの被害者を理解するワークブック』 に対する社会的情報処理の観点からの再検討

本多・伊庭（2016）は、性問題行動（性暴力）の加害者が自己のもたらした被害について学習し、性暴力被害と被害者について共感的な理解に接近し、被害者に対する自己の考え方や気持ちを検討することを目的に『性暴力被害とわたしの被害者を理解するワークブック』を作成した（本多・伊庭・隈部，2013；本多，2014）。全26のワークシートからなり、実施対象は限定せず、未成年者や知的・発達障害者児者も想定している。

共感とは他者の経験する感情をあたかも自分のことのように感じることであり、加害者が共感的な理解に向かうよう心理的支援するためには他者の理解の仕方や枠組みを把握（他者の視点取得）し、他者は自己とは「異なっていて当然と考える assumption of difference」（Ryan Leverage, & Lane, 2010, p. 303）ことを前提に、他者の感情状態に対して認識する、という段階をたどると考えられる（Marshall & Marshall, 2014）。一方、過去のある出来事に対して生じた自己の感情に基づいて被害者の感情を推論するのは「同じであるのは当然と考える assumption of sameness」（Ryan et al., 2010, p. 303）にとどまり同情的な反応といえる。

Ryan et al. (2010, p. 304) は共感的認識や反応について、「いくつかの感情や欲求の手がかりを認識し、それら手がかりの意味を解釈し、そのような感情または欲求が生じて当然だと認めて反応する個人の能力」としているが、その前半部は社会的手がかり（自己の内部あるいは外部）が知覚され、整理され、解釈されるという社会情報処理の解読段階そのものである。解読段階での誤り、偏り、欠落などがあれば、たとえその（言語的）反応が適切であったとしても共感的理解とはいえないのではないかと考えられる。

このワークブックのシート20「わたしの被害者の気持ちの理解(1)」は共

性問題行動における認知の役割に対する考察

感的理解をテーマとしている。このシートでは以下の順にワークシートに記入する（本多・伊庭，2016，pp.81-84）。

- ①加害者のおこした性暴力の内容
- ②性暴力被害者
- ③加害者が気づいた，あるいは記憶している被害者の被害時の動作，表情，発言など外見から分かる具体的な様子
- ④上記③の外見上の状態や様子などを手がかりに推測した被害者の気持ちとその根拠
- ⑤上記④と同様に③をもとに推測した被害者の考えとその根拠。

このシート20を社会的情報処理の枠組みに沿って再検討すれば，③は解説段階の被害者についての知覚とのその組織化であって，④⑤はその解釈に相当する。最も重要なのは③の被害時の被害者の行動，表情，発言など外見上の状態についての知覚内容の記述である。それをもとにして，④被害者の感情，⑤被害者の思考をそれぞれ推論する。被害者に対する知覚の過不足や知覚内容の解釈等が不完全であれば共感的な理解はおぼつかない。

このシートはプログラムの対象者に心理的な抵抗感や圧迫感が生じやすく，様子が思い出せない，手がかりに気づかないとの反応もあるが，かといって性暴力の被害者はこういう状態であるとの一般化された情報は単なる知識にとどまるものであって，必要ではあるが共感的とは言えない。推論としてこのプロセスをたどることが共感的理解につながる。共感とは正確な認知（社会的情報処理）を必要とする³⁾。

5. スキーマ⁴⁾の位置づけと社会的情報処理

性暴力の理解とその被害者に対するプログラムを社会的情報処理の観点から再検討し，その解説段階で誤り等があれば修正等を行い共感的理解が深まるよう心理的に支援する。しかしこの社会的情報処理における問題は

被害者に関連した領域だけでなく性問題行動における認知の特性かもしれない (Murphy & Page, 2014, p. 158)。

社会的情報処理に誤りや偏りをもたらすものとして、性問題行動に関しては認知の根底にあるとされる機能不全のスキーマが着目される (Mann & Shingler, 2006; Murphy & Page, 2014)。機能不全のスキーマは、「構造とみなされ、認知的な内容を持ち、情報の処理に影響を与え方向づける」 (Mann & Shingler, 2006, p. 175。下線部は原著ではイタリック体。)ものとされる。スキーマは情報処理のプロセスにバイアスをかけ、その状況下にいる他者など環境にあるいくつかの手がかりのうち、どの手がかりに注意を向けるか、それら手がかりをどのように解釈するかに影響を与える。つまり「社会的環境の手がかりをわれわれがどのように処理するかを左右する」 (Murphy & Page, 2014, p. 156)、とりわけ機能不全のスキーマは「ネガティブまたはあいまいな人生での出来事に関する情報処理を認知 (表層認知) として出力するよう導く」 (Mann & Shingler, 2006, p. 176)ものとされる。

先述した Crick & Dodge (1994)、吉澤等 (2015) の「潜在的な知識構造-オンライン処理」という社会的情報処理モデルではスキーマは知識構造に位置し、オンライン処理に影響する。Crick & Dodge (1994, p. 83) は、スキーマには「(得られた) 情報がスキーマに一致しているかどうかを素早く分類して解釈を助ける」という効率化の利点があるが、スキーマに依存しすぎると眼前にある手がかりに気づかず、結果として不適切な行動を選択することがあるとする。

Mann & Shingler (2006, p. 177) は確認されている機能不全スキーマとして、敵意のある男性らしさスキーマ、疑り深いスキーマ、性的特権スキーマなどをあげ、Murphy & Page (2014, p. 159) はさらに、不利な立場スキーマ、優越スキーマなどを加えた。認知療法の領域でパーソナリティ障害を

性問題行動における認知の役割に対する考察

対象としたスキーマ療法（スキーマ・フォーカスト・アプローチ）を主張する Young (1999, p. 9) は、まだ実証された概念ではないと断りながら、「子ども時代に形成された非常に堅固で永続的なテーマであって、人生を通じて精緻になる」と述べ、「早期不適応スキーマ Early Maladaptive Schemas」と名付けた18のスキーマをあげた (Young, 1999, TABLE 1 pp. 12-16)。その特徴として以下の6点をあげる (Young, 1999, pp. 9-11)。

- ①無条件の信念や感情であること。
- ②無際限に永続的で変化に抵抗する。
- ③本人に意味あるもので繰り返されるが機能不全である。
- ④あるスキーマに関連した環境内の出来事で活性化する。
- ⑤活性化すれば強い感情と結びつく。
- ⑥トラウマ経験の結果ではない。

根底にあるスキーマによって情報処理プロセスに誤りや偏りがもたらされるならば、機能不全のスキーマを修正するあるいは適応的なスキーマを新たに獲得するという心理的支援の方向性が考えられる (Mann & Shingler, 2006, pp. 179-181; Murphy & Page, 2014, pp. 165-170)。スキーマに着目した心理的支援においては、治療への動機づけ等の治療関係の確立後のスキーマのアセスメントが重要であり、その技法としてライフ・マップ、日記や思考の記録シートなどがある。ライフ・マップはこれまでの人生を横線に見たてて図示し、これまでのポジティブな出来事もネガティブなものもプロットし、それぞれについて自己、他者、世界についての見方を探求する。日記や思考の記録シートも思考や行動を振り返りながらスキーマを特定するものである。

スキーマのアセスメントを通じて、クライアント（心理的支援の対象である加害者）にスキーマの存在を気づかせ、スキーマの妥当性や意味をクライアント自らが点検するという心理教育にもつながる。スキーマを絶対視せず相対化し、疑ってみることが心理的支援のスタートであり、そのうえでスキーマの扱い方を援助する。技法として、スキーマをばら色の色眼

鏡 (Mann & Shingler, 2006, pp.181-182) や古い靴 (Young, 1990, 1994, 1999, p.30) など比喩による説明, 先のライフ・マップ, ロールプレイ, ソクラテス式問答による面接等がある。こうした心理的支援を通じて, 機能不全のスキーマと問題行動とのつながりに気づき, その妥当性を探求し, 健康なスキーマへと修正する。機能不全のスキーマの修正と並行して別の健康的なスキーマを育成し, 社会的情報処理を再構成することも必要だろう。

このように具体的な技法等が提案され, Mann & Shingler (2006, p.184) は「性犯罪者への治療は加害に対する言い訳や正当化に焦点化することを止め, 自己, 他者, 世界に対する根底ある中核信念に働きかける認知療法的手法を採用すべきである。」とするが, 一方それらを測定することは困難あることから実証的に支持するには限界があり, 特にスキーマ・セラピーの技法は有用と思えるが, 「性犯罪者治療の成果にはまだ関連はしていない」との指摘がある (Murphy & Page, 2014, p.171)。

性問題行動における認知の役割を概観し, あわせて社会的情報処理理論に触れた。認知, とりわけスキーマに対する位置づけや特性は研究領域によって少しずつ異なる。性犯罪者治療の領域の研究 (Mann & Shingler, 2006; Murphy & Page, 2014 等) においても認知心理学等をベースとした社会的情報処理理論 (Crick & Dodge, 1994; 吉澤等, 2015) においても社会的情報処理とスキーマに着目されるが, 研究の背景やこれまでの経過等が異なるため焦点が異なる。前者は機能不全のスキーマとその影響であるが, 後者は社会的情報処理構造とプロセスである。それぞれの有用性を認め差異を意識しつつ実証的データの蓄積にあわせて理論モデルの議論はこれからも続ける必要がある。

われわれの心理的・社会的支援の実践の対象である発達の途上にある非

性問題行動における認知の役割に対する考察

行少年や認知能力や言語能力などに制限のある知的・発達障害者児者を考えれば、臨床的には機能不全のスキーマの強い影響と、社会的手がかりに対する誤処理が相互に作用（Crick & Dodge, 1994, p. 75 figure 1., p. 76 figure 2. 参照）しているのではないかと思われる。多様な心理的支援の対象に対して適用可能なモデルは、スキーマと社会的手がかり知覚・解釈を分離せず、スキーマを含めた社会的情報処理プロセスを対象にした心理的支援プログラムの必要性が浮かび上がる。さらに、機能不全のスキーマは同時に感情も引き起こしており、この小論では全くふれなかったが感情をどのように位置づけ、心理的支援に組み込むかも大きな課題である。

小論を終えるにあたって、文献の翻訳については「ASB 研究会/反社会的行動のある知的障害者等への支援研究会」メンバーの協力を得たことに感謝し付記する。

注

- 1) 性暴力とも呼ぶが、それは身体的な暴力を伴ったものだけを指すのではない。被害者の意思に反し、同意がなく、その結果当事者同士の間に対等さの保証がなく、強制的手段による行為を性暴力とする。違法性、加害性、行為者の意図などだけに着目しない。同意等の詳細については本多・伊庭（2016, p. 16-18）を参照。
- 2) American Association on Intellectual and Developmental Disabilities: AAIDD Retrieved from <http://aidd.org/intellectual-disability/definition#.VNMUN0K9ewI> (September 14, 2016)
- 3) セラピストクライアント関係を論じた Rogers (2007, p. 241a reprint from 1957) は、「パーソナリティの治療的変容についての必要にして十分な条件」のなかで「5. セラピストはクライアントの内的な視点（準拠枠）を共感的に理解していると体験」するとし、さらに「5 場面の条件は、体験に対するクライアント自身の気づきを正確で共感的に理解していることをセラピストは体験することである。」(p. 243) と述べる。その結果、「“あたかも・・・ように” (as if) という特性を失うことなく」という条件が可能となる。

- 4) 認知心理学では「過去経験や外部環境に関する長期記憶中の構造化された知識の集合であり、出来事、行為、事物などの一般的知識を表現する」(有斐閣 認知心理学ハンドブック, 2014) ものと定義される。

【文 献】

- Abel, G. G., Gore, D. K., Holland, C. L., Camp, N., Becker, J. V., & Rathner, J. (1989). The measurement of the cognitive distortions of child molesters. *Annals of Sex Research*, 2, 135-153.
- Blasingame, G. D. (2005). *Developmentally disabled persons with sexual behavior problems: Treatment · management · supervision*. 2nd Edition. The Safer Society Press.
- Crick, N. R., & Dodge, K. A. (1994). A Review and Reformulation of Social Information-Processing Mechanisms in Children's Social Adjustment. *Psychological Bulletin*, Vol. 115, No. 1, 74-101.
- Hansen, K. & Kahn, T. J. (2012). *Footprints: Steps to a Healthy Life*. Second Edition. Safer Society Foundation, Inc
(ハンセン, K・カーン, T. J. 本多隆司・伊庭千恵 (監訳) (2015). 性問題行動のある知的障害者のための16ステップ:「フットプリント」心理教育ワークブック第2版 明石書店)
- 本多隆司 (2011). 「フットプリント」による性暴力加害者への実践的介入の試み」*仏教福祉学*第21号69-92.
- 本多隆司・伊庭千恵・隈部一彦 (2013). 「性暴力被害とわたしの被害者を理解するワーク」の検討 日本発達障害学会第48回研究大会
- 本多隆司 (2014). 「性暴力被害とわたしの被害者を理解するワーク」の改訂 *仏教福祉学*, 第23号, 1-13.
- 本多隆司・伊庭千恵 (2016). 性問題行動のある知的・発達障害児者の支援ガイドー性暴力被害とわたしの被害者を理解するワークブック 明石書店
- 伊庭千恵・本多隆司 (2016). 性問題行動のある知的障害者への地域生活支援の方策に関する考察」*日本発達障害学会*第51回研究大会発表
- 川口敦子・松澤知子・細田陽子・陳愛玲・伊庭千恵・隈部一彦・福嶋裕美・本多隆司 (2007). 反社会的行動のある知的障害者への支援 その1ー被害

性問題行動における認知の役割に対する考察

待体験との関連性の検討— 日本心理臨床学会第26回大会発表

- 隈部一彦・伊庭千恵・細田陽子・姥敦子・竹腰知子・福嶋裕美・本多隆司
(2015). 性問題行動のある知的・発達障害者への心理学的支援の考察 日本心理臨床学会34回大会発表
- Levenson, J. S., & Willis, G. M. (2014). Trauma-Informed Care with Sexual Offenders. In M. S. Carich & S. E. Mussack (Eds.) *Handbook of sexual abuser assessment and treatment*. (pp. 243-269). The SaferSociety Press.
- Mann, R. E., & Shingler, J. (2006). Schema-driven cognition in sexual offenders: Theory, assessment and treatment. In Marshall, W. L., Fernandez, Y. M., Marshall, L. E., & Serran, G. A. (Eds.) *Sexual offender treatment. Controversial Issues*. (pp. 173-185). Wiley.
(ウイリアム・L・マーシャル, ヨーランダ・M・フェルナンデス, リアム・E・マーシャル, ジェリス・A・セララン(編著) 小林万洋・門本泉(監訳)
(2010). 性犯罪者の治療と処遇: その評価と争点 日本評論社)
- Marshall, L. E., & Marshall, W. L. (2014). Self-Esteem, Empathy, and Relationship Skills Training. In M. S. Carich & S. E. Mussack (Eds.) *Handbook of sexual abuser assessment and treatment*. (pp. 177-192). The SaferSociety Press.
- Murphy, W. D., & Page, I. J. (2014). The Role of Cognitive Factors in Sexual Offending. In M. S. Carich & S. E. Mussack (Eds.) *Handbook of sexual abuser assessment and treatment*. (pp. 151-175). The SaferSociety Press.
- Rogers, C. R. (2007). The Necessary and Sufficient Conditions of Therapeutic Personality Change. *Psychotherapy: Theory, Research, Practice, Training* Vol. 44, No. 3, 24-248 (This article a reprint from *Journal of Consulting Psychology*, 1957, Vol. 21, No. 2, 95-103).
(ロージャズ C. R. 著 伊東博(編訳)(1967). パースナリティ変化の必要にして十分な条件 ロージャズ全集第4巻サイコセラピイの過程 岩崎学術出版社)
- Ryan, G., Leversee, T. & Lane, S. (2010). Integrating Theory and Method: Goal Oriented Treatment. In G. Ryan, T. Leversee, & S. Lane. (Eds.) *Juvenile Sexual Offending: Cause, Consequences, and Correction*. 3rd edition. (pp. 263-310). John

Wiley & Sons.

- Treat, T. A., McFall, R. M., Viken, R. J., & Kruschke, J. K. (2001). Using Cognitive Science Methods to Assess the Role of Social Information Processing in Sexually Coercive Behavior. *Psychological Assessment*, 13(4), 549-565.
- 吉澤寛之・吉田俊和 (2010). 中高校生における親友・仲間集団との反社会性の相互影響：社会的情報処理モデルに基づく検討 実験社会心理学研究 Vol. 50, No. 1, 103-116.
- 吉澤寛之 (2005). 社会的情報処理モデルによる反社会的行動研究の統合的考察—心理学的・生物学的・社会学的側面を中心として—名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), 52, 95-122.
- 吉澤寛之・大西彩子・G・ニジ・吉田俊和 (2015). ゆがんだ認知が生み出す反社会的行動：その予防と改善の可能性 北大路書房
- Young, J. E. (1999). *Cognitive therapy for personality disorders: A schema-focused approach*. Third edition. Professional Resource Press.
(ジェフリー・E・ヤング (著) 福井至・貝谷久宣・不安・抑うつ臨床研究会 (監訳) 福井至・笹川智子・菅谷渚・鈴木孝信・小山哲平 (訳) (2009). パーソナリティ障害の認知療法：スキーマ・フォーカスト・アプローチ 金剛出版)